

消えた青い影

— 長野から繋いだ夢の終焉 —

始まりは1998年、銀世界の長野だった。会場を埋め尽くす熱気の中、私の目を釘付けにしたのは、テレビ朝日のロゴと共に輝く「ドラえもん」のピンバッジだった。海外のプレスたちがこぞって探し回るその青い姿は、日本のアニメが世界を制した証そのものだった。あの瞬間、私の心に灯った情熱の火は、4年に一度の祭典を追いかける一生の旅へと変わった。

それからの年月、私のコレクションは日本の放送文化の歩みそのものとなった。ソルトレイク、北京、リオ……。ドラえもんは常に、その時代の先端を行く競技の装いで私の手元にやってきた。そして迎えた東京2020。自国開催という最高の舞台上、富士山や江戸の粋を背負ったドラえもんのバッジは、私の額装の中で文字通り「頂点」を極めた。それは、長野から積み重ねてきた20数年の努力が、美しく結実した瞬間だった。

しかし、運命の歯車は静かに狂い始める。2022年、北京の地。私はいつものようにドラえもんの姿を求めたが、手元に届くのは放送局の無機質なロゴばかり。あの温かい笑顔のバッジは、忽然と姿を消した。不祥事に伴う制作の見直しや権利関係の厳格化といった、大人の事情という分厚い壁が、ファンの純粋な情熱の前に立ちはだかったのだ。

そして2024年、私はパリの街を歩いた。エッフェル塔を背に、ピカチュウやルフィが新たな「最強の交換ピン」として世界を席卷する中で、私は心のどこかで「彼」の復活を信じていた。だが、最後まで青い影が戻ることはなかった。長野で始まったドラえもんの物語は、東京での輝きを最後の一頁として、静かに幕を閉じたのである。

現在、私の手元にはミラノ・コルティナのルフィやピカチュウが並んでいる。時代の主役が交代し、コレクションは新章へと突入した。それでも、額装された東京のドラえもんを見つめるたび、雪の長野で感じたあの震えるような感動が蘇る。もう二度と新作が生まれることはない。だからこそ、私が守り抜いてきたあの青いピンバッジたちは、永遠に色褪せることのない、私の人生の至宝なのである。

玉井政道